

斎藤茂吉研究：詩法におけるニーチェの影響

前田，知津子

<https://doi.org/10.15017/1470511>

出版情報：九州大学，2014，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

論文審査等の結果の要旨

斎藤茂吉の文学上の主要な仕事は短歌の創作と、短歌にかかわる評論に大別することができる。そのいずれにおいても、万葉集や仏教などの東洋的なものの知識と西洋的な知識が共存していることが認められる。本論文は、そのうちのとくにニーチェの著作から受けた影響の反映の様相を丹念に検証している。

日本の伝統的な芸術である短歌は、隣接する芸術形式である狭義の詩（新体詩）と較べて西洋的な要素を受け入れにくいと考えられるが、例えば茂吉とほぼ同時代の北原白秋の処女歌集「桐の花」がフランス詩風の感覚を取り入れていると一般的に評されているように、外国の要素に対してまったく排他的であるわけではない。茂吉の場合、たんに短歌の実作においてニーチェ的なモチーフを採用したというのではなく、芸術創作の動機や芸術理論の根幹的な部分においてニーチェの考え方に影響を受け、それに同化していることが本論文で強調されている。茂吉とニーチェのつながりについては先行研究が存在するが、本論文はそれらの先行研究において触れられていない点を補足して考察し、また論証不十分であると思われる点については新たな見解を提示しており、今後、斎藤茂吉研究の必読文献になると考えられる。

本論文は、序と本論8章と結の構成になっている。序章では、茂吉におけるニーチェの重要性を述べ、ニーチェを視野に入れた茂吉研究の状況を取りまとめ、その上で、本研究の目的、研究方法などを提示し、各章の概要を述べている。第I章では、主として、高山樗牛を介した茂吉のニーチェ受容の様相を明らかにしている。第II章では、大正9年9月に発表された「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」（「短歌に於ける写生の説」）という茂吉の写生説の由来を検討し、それがニーチェの「悲劇の誕生」中の「抒情詩人は根源的一者と一体となる」という考え方から発想を得たものであると結論づけている。従来の研究では、茂吉は「悲劇の誕生」は読んでいない、とされてきたが、論者は同書に見られる子供の石遊びのモチーフと同様のものが茂吉の歌論「童馬漫語」に見られることなどを根拠にして、茂吉と同書とのつながりを論証している。第III章では、先行研究でこれまで指摘されてきた、「柿本人麿私見覚書」中の「ディオニソス的」の語の使われ方に再検討を加え、茂吉は、人麿を、御用歌人として朝廷において献歌を要請された際でも、献歌の要請という外的契機に従って創作するというよりも、自在に「純粹衝迫」（芸術創作の内的衝動のようなもの）によって創作することのできる芸術家であると考え、そうした意味で人麿を「ディオニソス的」であると考えたのだ、と論じている。第IV章では、茂吉の「力」への憧憬に注目し、「多力」という訳語の由来を通して茂吉におけるニーチェ受容を考察している。第V章では、第11歌集の表題とされた「暁紅」（ニーチェの *Morgenröthe* の書名の茂吉訳）の語の意味合いを考察している。第VI章では、ニーチェの「偶像の黄昏」を踏まえて書かれた「古代芸術の讚」に注目し、茂吉が与えた訳語「多力に向ふ意志」が現われるこの文章を、生田長江の翻訳と対照しつつ分析している。第VII章では、明治45年と昭和24年作中に現われた〈犬の長鳴き〉という題意の歌に注目し、これまであまり論じられることのなかったこれらの歌が「ツアラトゥストラ」第三部「幻影と謎」

の章の影響下に成立した作品であることを論じている。第Ⅷ章では、遺稿集「つきかげ」に注目し、ニーチェの「芸術の夕映え」（「人間的な あまりに人間的な I」）との関係を考察している。結章では、茂吉においては、ニーチェは芸術観のみならず生の深いところで受容され、かつ、それが決して一過性のもものではなかったことが本論文で論証されたことを強調し、その上で、ニーチェを念頭において書かれたと思われる茂吉の短歌の解釈を試みている。

本論文は、茂吉とニーチェの関係についての先行研究を十分に踏まえた議論を展開しているという点で安定感のある論文であり、他方、新たな知見を提供しようとする意志を感じさせる論文である。とくに第Ⅱ章と第Ⅲ章に見られるような、一定の説得力をそなえた独自の見解を提示する論考は本論文の価値を高めるものであろう。短歌の実作に対するニーチェの影響についての考察がもっとあってもいいのではないかという印象もぬぐえないが、三十一音節という限られた芸術形式を素材とする論考よりも、歌論についての論考に重点を置いたほうが考察が深まるとした方法論は成功したのではないかと評価できる。本論文はニーチェとの関係のみならず、斎藤茂吉研究全般において学問的寄与をなすものであると考えられるため、この業績に対して、博士（比較社会文化）の学位を授与するにふさわしいと判断した。

【2,000字以内で記入すること】

（比甲様式 13-3）